新左翼

1969年
4月5日
第25号
月3回5、15、25日発行
1部 15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円〒共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2—10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88855
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

記事紹介

二面
闘いの現在と今後＝京大反戦連合合宿から報告

三面
三里塚からの通信＝三里塚常駐社会党オルグ村上信義
全国の基地にデモ＝二十三日反安保統一行動

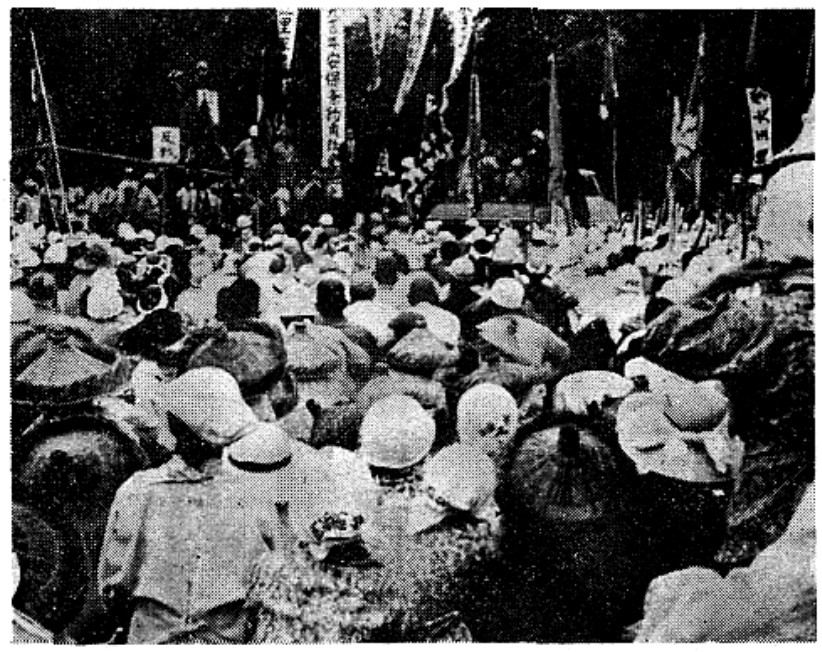
四面
学生運動の諸問題＝マンスリーレビュー編集部
論文

三里塚空港 **10月着工許さぬ！**

全国闘争集会開く

暴圧はねのけ一万二千名

「三里塚軍事空港軍事業認定粉砕全国闘争集会」は、三十日午後一時からどしゃぶりの雨をついて、三里塚第一公園でひらかれ、現地の農民とともに、全国からかけつけた労働者、農民、学生、市民約一万二千名が参加しておこなわれた。悪天候にもめげず、これだけの大量の動員があったのは三里塚闘争はじまって以来初めてのことで、地元の農民を勇気づけただけでなく、全国の反安保・基地撤去の闘争がさらに前進していることを示した。それだけに当日の集会に対する警察の弾圧ははげしく、全学連の貸切りバスは三回も検問のため停車させられ、そのたびに機動隊は学生をバスから降して、



リンチを加えるという卑劣な弾圧を行なった。

七十年度末完成から逆算して本格工事を本年十月に着手しなければならない土壇場においこまれた佐藤政府は、土地だけでなく道路拡張部分の売収をはじめ、そのための準備にいま狂奔している。七十年安保粉砕闘争の重要な一環である三里塚闘争は、いよいよ重大な段階をむかえた。次はこの集会に東京から参加した労働者の報告と、社会党三里塚常駐オルグ村上信義氏の「三里塚からの通信」（三面掲載）である。（写真は全国闘争集会のもよう）

雨風に飜る赤旗の波

警察の重包囲下に敢行

【東京支局発】三月三十日その日の成田は、三月の終りというのに肌寒いような、加えて激しい雨が、断続的に降るという最悪の状態であった。私たちの乗った車は、会場である第二公園の手前三百㍍ぐらいのところで、機動隊に止められ、車内を点検された。その横暴な行為に激しい怒りを感じるとともに、会場に通ずる四方の道路を遮断し、会場を包囲した機動隊に、かつての警察国家の再来を感ずる。同時に、三里塚闘争がいかに日帝にとって恐ろしい存在であるか、ということを示しているように思えた。

会場は昨日からの雨のためドロ沼化していたが、演壇を中心に、現地農民、労働者、学生が会場を埋めつくし、会場に入りきれない学生の一群は道路に立っていた。雨あしはさらに激しく、風もでてきたが、会場を埋めた約一万二千人のなかには傘もさすに、全身ずぶぬれの学生諸君もあった。

一時二十分、反対同盟戸村一作委員長の基調報告とともに、集会は開かれた。戸村委員長の声は、風と雨のため、かき消されようとしたが、力強く闘う現地農民の決意を表明し、あらまし次のように報告した。

「現国会において、社会党議員の追及によって政府は、三里塚新空港が、国際空港として、資本の要請に答えるばかりでなく、軍事空港として使用されることを明らかにした。今や農民の土地が奪われるか否かの問題ではない。日本がふたたびアジアの同胞の敵として、日本人自身が、殺人者になるか否かの問題であり、闘う相手は日帝である。反安保闘争は、この三里塚をいかに闘うかにかかっている。七十年末新空港完成をめざす日帝は、逆算して今秋十月本工事着工、四月資材輸送道路建設、基礎工事完了しなければならないギリギリのところまで追いこまれている」と語り、日共代々木＝反革命集団の三里塚闘争における犯罪を明らかにして「雨よ降れ、風よ吹け、もっと激しく降れ、もっと激しく吹け、われわれ反対同盟に結集する者は一歩も退くことなく最後まで闘う」と宣言した。

渋打つ赤旗は、雨にぬれ、一層鮮やかに闘う者の決意を象徴し、風に揺れて巨大な波のごとくであった。集会に参加した全国の闘う労働者、農民、学生の連帯の挨拶と、決意表明が続いた。福岡、神戸、山梨、東京、千葉、埼玉の各反戦青年委、新潟動労・国労の労働者、土地接収問題で闘う新潟の農民、砂川基地の要塞のなかで闘う砂川基地反対同盟のアピールがあった。老人行動決死隊、婦人行動隊の闘打つ決意表明、一一・二四で不当に逮捕された青行隊隊長萩原氏と二人の学生の決意表明三里塚高校共闘会議の高校生の、戦列への参加の報告が行なわれた。三時過ぎ、集会がおわると、四千労働者が雨中にもめげず参列し、その決意を新たにしたことは、戸村委員長の挨拶にもあるように、ベトナム戦争後のアジア侵略を意図する日帝が、七十年末空港完成をめざすために、ギリギリのところまで追いこまれた現時点で、重要な意義を持つものと決われる。それは、基地が権力の側から見た場合、最も弱い環であり、三里塚は闘う主体の側から見たばあい、最も先進的、戦闘的に闘われ、日本の基地闘争に新しい質を展開しているからである。しかも、今集会で特徴的に見られた国労、動労及び各地反戦の労働者の、多数の参加を得たことは、学生はもちろん、高校生、中学生まで、闘争の戦列に参加してきたことと同様、重要な意味を持つと言われる。

それは、学園闘争で切り開かれた闘争の質を、基地闘争に普遍化し、それを生産点に、いかに持ちかえるか、という実践的な課題を提起しているからである。敵に残念であったのは、この問題を討論する場のなかったことである。富里では、すでに代替地という名で土地造成が進んでいる。権力は、さらに狡猾に闘う者の心を揺さぶり懐柔し、あるいは弾圧してくるであろう。七十年安保の問題は、この三里塚・沖縄を中心とする基地闘争をいかに闘うかであり、この闘いの質を生産点で、いかに具体化するかにかかっているものと思われる。

（N）

沖縄から五百名上京

首相官邸に座込み

4・28に各団体の計画

沖縄から上京する五百名の青年による首相官邸座込みを中心にして、四・二八沖縄デーにむけて、各地で集会やデモがおこなわれているが、関西の反戦平和団体の行動スケジュールは次のとおり。

沖縄では二十八日が春闘第一波で各労組がストライキをふくむ実力行使に入る。本土では岩井総評事務局長のB52撤去六月ゼネスト論は実行される見通しはなく、春闘は四・一七公労協ストにあわせて民間大手もスト態勢をくんでいるが、労働組合活動家のなかにはここで妥結させないで、闘争を四・二八にまで引きのばし"沖縄"の政治的意義をそのなかでできるだけ訴えていこうという動きが、各地でつよまっている。

四・二八は大阪では反安保共闘主催で大手前公園でおこなわれる見通しだが、デモコースは御堂筋だけでなく、"緑健組合"用として天満～淀屋橋コースも設定されており、全大阪反戦を先頭として各地区反戦は、圧倒的多数の労働者を御堂筋に結集して、官憲の弾圧を粉砕して全面フランス式デモをかちとることをめざして、準備中である。

各団体の予定は次のとおり。

◆大正区べ平連
塩水港製糖解雇反対闘争を支援する市民の会準備会を作ることを四月の活動目標にしている。十三日に安保・沖縄問題討論会をひらく。

◆全大阪反戦
四・二八に各単産で実力行使を行なうよう努力しこれをめざして十八日に全大阪反戦の呼びかけで集会とデモを行う。二十日東京・明治公園で沖縄奪還・七十年安保粉砕の全国反戦集会がひらかれるので、全大阪反戦から代表をおくる。

◆北摂反戦
十四日ダイキンの軍事生産を告発するデモと集会

◆反戦教師の会
十九日沖縄問題討論会
大教組は二十八日沖縄を一時間教え、その後一時間カットの職場集会を行なう。

◆デイゴの会
十二～十三日原水禁・沖縄連と共催で、沖縄奪還関西シンポジュムをおこなう。映画「沖縄列島」と音楽劇「沖縄＝海の底深く」（四月八～十二日午後六時半御堂会館ホール）の成功のためとりくむ。

◆東大阪べ平連
二十七日北市民会館で沖縄大討論会をおこなう。

◆全大阪高校反戦教師の会
十三日四・二八にむけての討論集会

十九日奈良本教授の講演と、安保・沖縄問題の討論会

◆関西地区反戦
十三日午後労学集会、安保・沖縄問題の討論　場所＝吹田市民会館

十七日中教審答申粉砕全学連統一行動に共闘
二十六日地区反戦を軸に諸団体に呼びかけ四・二八をかちとるために御堂筋デモをおこなう。

◆金属反戦
七日　信太山自衛隊基地撤去・安保・沖縄討論会　堺教員会館
十四日ダイキン闘争に参加
二十日信太山自衛隊基地へデモ

◆関西べ平連
十三・二十七日梅田大学　梅田地下街で、その後御堂筋デモ
十九日ベトナム・沖縄を徹夜で語ろう
二十日ダイキン工業へデモ

◆平和のための婦人行動委員会
五日沖縄を考える集会

大京 12日からバリ祭

ゴーゴーやフォークも

教養部無期限バリケードストのなかで新学年をむかえた京大では全学共闘会議は京大のバリケードに開放し、支配者のための学問の場から反大学運動の場にかえることによって、学園闘争のあらたな質的展開をかちとろうとしている。京大全共闘は次のようによびかけている。

「バリケードの中の解放区は、社会と隔絶した楽園ではない。それは、永続的な闘いが一時的な均衡をもった革命的な空間と時間なのだ。バリケード解放区は、固定したものではない。それ自体がひとつの運動なのだ。解放区は、権力との熾烈な闘いをえながら、絶えず拡大・増殖されねばならない。バリケードの内実は、いわゆるブルジョア思想や制度と闘いながら絶えず、浄化させられなければならない。大学を足場に闘われるこのような運動をわれわれは、反大学運動と呼んでいる」

京大全共闘では新入生を獲得しバリケードをつよめ、反大学運動を推進するために次のような計画をすすめている。

十一日に大学当局は時計台で入学式を予定しているので、これを実質的に粉砕するために、東大全共闘の最首悟氏と小田実氏（交渉中）が、新入生に講演する。

十二日から十四日の間、教養部構内でバリケード祭をおこなう。

十二日はゴーゴー・パーティー映画「ビートルズ、ヤァヤァヤァ！」を上映。十三～十四日南大阪べ平連や北摂べ平連のフォークソンググループが反戦フォークをうたう。この間学生テマチュア劇団の芝居があるほか、各闘争委は資金カンパをかねて、食堂や売店をひらき、バリケードも美しくかざって、学園祭のような雰囲気をだそうと、各サークルで計画している。三日までに決定している講演会の予定は次のとおり。十四日二時より松田政男氏、同日三時半より寺山修二氏、十五日一時より斉藤道雄氏。

この間、大江健三郎、野坂昭如、瀬戸内晴美などの各氏がきて、学生と一緒にバリケード祭をたのしむことになっている。そのほか現在広範な知識人、芸能人に交渉中で、バリケード祭の内容はさらに豊富なものになっていくものとみられている。

反大学の具体的内容は現在検討中で、バリ祭までに決定し発表することになっている。

新左翼東京支社設立

カンパにご協力を！

昨年八月発行以来「新左翼」は読者のご支持をえて、発展してきました。七〇年安保を来年にひかえ、反戦青年委員会と全学連に結集する戦闘的労働者・学生の闘いは、日本帝国主義支配者たちの肝を冷させています。分裂している新左翼諸党派は闘いのなかで、真の革命的潮と反革命的潮の分化が徐々に始まっており、革命的潮は統一の方向にむかってすすみつつあります。

「新左翼」は党派から自立した反戦青年委員会運動を先進的に形成してきた関西の地で発行されました。しかし、全国的政治闘争の中心である首都＝東京の地に「新左翼」東京支社をおくことは、現在の政治情勢のもとで、決定的に重要な時期になっております。

新左翼社は、読者と協力委員会の皆さんのご援助によって、東京支社をぜひ設立したいと考えております。

東京支社設立のための資金カンパに、読者と協力委員会、その他多くの皆さんの心からのご協力をお願いします。

目標額　三十万円
期日　六月三十日

新左翼社
新左翼協力委員会

この集会で、全国の基地を闘う者が、雨中にもめげず参列し、その決意を新たにしたことは、戸村委員長の挨拶にもあるように、ベトナム戦争後のアジア侵略を意図する日帝が、七十年末空港完成をめざすために、ギリギリのところまで追いこまれた現時点で、重要な意義を持つものと決われる。それは、基地が権力の側から見た場合、最も弱い環であり、三里塚は闘う主体の側から見たばあい、最も先進的、戦闘的に闘われ、日本の基地闘争に新しい質を展開しているからである。しかも、今集会で特徴的に見られた国労、動労及び各地反戦の労働者の、多数の参加を得たことは、学生はもちろん、高校生、中学生まで、闘争の戦列に参加してきたことと同様、重要な意味を持つと言われる。

それは、学園闘争で切り開かれた闘争の質を、基地闘争に普遍化し、それを生産点に、いかに持ちかえるか、という実践的な課題を提起しているからである。敵に残念であったのは、この問題を討論する場のなかったことである。富里では、すでに代替地という名で土地造成が進んでいる。権力は、さらに狡猾に闘う者の心を揺さぶり懐柔し、あるいは弾圧してくるであろう。七十年安保の問題は、この三里塚・沖縄を中心とする基地闘争をいかに闘うかであり、この闘いの質を生産点で、いかに具体化するかにかかっているものと思われる。

（N）

闘いの現在と今後

反戦連合宿からの報告

京大教養部闘争委員会

京大教養部闘争委員会をになっているノンセクトグループ、反戦連合は、闘争に大きな役割をはたしてきたが、入試阻止闘争を実力闘争として組織できなかったことを自己批判的に総括し、「闘いの現在と今後」という文書を発表した。大学闘争を政治闘争に直結する視点から運動を導きだそうとするすべての政治セクトに対して、大学闘争を教育という社会の一分野における闘争としてとらえ、その分野における権力支配の構造と闘うことによって政治闘争にせまろうとする反戦連合の闘争への接近の方法は、今後の学生運動にひとつの示唆を与えるものである。現在の学生運動は、政府の〝七ヒ年対策〟というきわめて厳しい弾圧にうちかって、運動をすすめなければならないのであるが、広範な大衆を結集し、持続的な闘いを展開するには独占資本の大学支配もふくめて、敵階級の大学に対する政策総体を暴露し、それに対する闘争を組織するためには、この報告は無視することのできない問題提起であろう。

合宿の位置づけ

教養部C闘争委員会の発足は、京大における反戦連合運動を抜きにしては論じ得ない。そして、現在教養部C闘争委は一定程度分解と動揺の相を呈している。このC闘委の分解と動揺の総括をわれわれは政治状況に即して、深刻に行うと同時に、その総括を徹底させるため、反戦連合運動にたちかえる事によって総括の厳格を試みた。その目標を略記してみると次のようになる。

三―九　反戦連合運動からC闘委運動への過程
三―一〇　C闘の動揺の総括――二・一三、一四、二・二六の総括――
三―一一　政治状況の現在と今後
三―一二　今合宿の総括
以下、①C闘委運動の原理　②京大闘争の位置づけと展望、③教養部闘争の展望と分化して論じていこうと思う。

（1）C闘委運動の原理

反戦連合運動の理念は、個人の組織者化を通じて、みずからが直接民主主義の原理を貫徹することにあった。そして、反戦連合運動のスローガンを「反戦反安保」とすることによって、その「反戦」の内実を自己で展開し、また、展開すべきであるとした。そのことによって、反戦連合のメンバーは「反戦」闘争を取組んできた。その過程で、一〇・二一以後、一〇・二一のグラスストライキ実行委員会をクラスで恒常的研究サークルなどとして組織化し、その中で東大日大闘争の研究会を日常化した。また、その中で一・一・二二に東大日大全共闘の要請によって京大の反戦連合として東大へ行くことによって、その「反戦」闘争を戦う部隊としてあったのが、C闘委においては学園闘争を戦う部隊として存在しているということがわかるだろう。そして両者とも、個人原理を原点にたっているわけであるが反戦連合運動が「反戦」の内実展開であった。C闘委は学生存在（＝自己）の内実展開であるともいえよう。もっと続けていうならばC闘委運動は、ある種の学生行動委員会運動である。つまり、自己の存在である学生存在が、一体、「どこから来りて、どこへ行くのか？」を問うことによって、自己の矛盾の総体と対決し、その対決を通して各個人が自立した普遍、普遍的団結にいたることを闘争の原点とするのである。

以下、(3)においては若干ふれるC闘委の分解と動揺についても、この学生行動委員会における学生存在論と普遍的団結をつねに原点として論じている。

（2）京大闘争の位置づけと展望

日本帝国主義が、その延命の最も大きな環である労働者管理を合理化という形で帝国主義的改編を行うと同時に、産業界の教育に対する働きかけも活発化した。

つまり、以前は自由競争の名前のもとで各企業は企業内に研究開発技術振興の研究機関を設け、互いに競っていた。しかしながら、現在の国際間の熾烈な市場獲得、帝国主義間競争の中で企業内研究制度は残存しつつも、その研究を大学教育体系の中に集中しはじめた。このことを、われわれの掲げる二本のスローガンが表している。つまり産学協同路線粉砕！国大協自主規制路線粉砕！

また、われわれの過去、現在のほとんどを貫徹している、競争による試験制度は、われわれに対して、〝万人の万人に対するたたかい〟を強制するものとしてしりぞけられねばならない。以下、略条書きをもって示していこうと思う。

(1) 産学協同路線粉砕

(イ)すべての委託研究を拒否せよ
産学協同路線のすべてを、この委託研究に求め、それ以上の産業界とのゆ着を逃れようとしない民青系諸君の誤りは明らかである。

(ロ)資本の自己増殖に有用とされるブルジョア的価値体系粉砕
このスローガンは、次の三つによって補完されねばならない。つまり、(1)現在の封建的講座制解体(2)産業界に有用な研究を価値あるものとする学科目制粉砕、(3)ブルジョア的価値体系に対抗的自主講座獲得

(ハ)大学の格差付けによる無批判的人間の養成機関、管理者養成機構粉砕
現在の大学が教育という名前のもとに、細分化された研究を行なうことによって、体制に対し無批判的人間をつくり出すという、現在の教育体系粉砕。

(2) 国大協自主規制路線粉砕

(イ)経理全面公開
現在の大学が政府文部省から予算を頂戴（?!）することによって政府の大学支配が貫徹され、それが一般に公開されぬ密室の中で行なわれることによって、文部官僚―ボス教授―講座制という形で支配が貫徹している。したがってわれわれは、「支配の物質的流通機構」を明らかにすること（経理全面公開）によって大学の官僚機構を暴露し、予算権の第一歩を踏み出すと同時に大学が、いわゆる体制の中でベッタリくっつき日本帝国主義にスッポリ組みこまれているということを明らかにする。

(ロ)教授会解体
教授会が現在「国有財産の管理者」という名前のもとで、われわれは全学協議会方式を加味代行、奥田総長による話し合い路線の側度化であるとして、断固粉砕し明確に教授会解体を掲げて闘わねばならない。

(3) 政府文部省の大学支配粉砕

教育の帝国主義的再編、とりわけ中教審をめぐる一連の政府文部省の動向はわれわれにとって注目すべきものがある。教育そのものが帝国主義支配の重要な手段であるが、その教育が、とりわけ大学教育が帝国主義的にまだ貫徹しきれていないところに政府文部省の動きがある。この反動化の嵐は「トロツキストの挑発」によって生み出されたものではなく、帝国主義支配の貫徹を目的として出されたものであって、この中教審に対する闘いはわれわれの学園闘争の死活をかけた闘いである。われわれは挑発になるから闘わないという立場に立つのではなく、闘いの中で出されてきた学生運動破壊「法」である政府文部省の立法化を粉砕していくという立場に立たねばならない。

具体的には、中教審答申に対してわれわれは明確な政治ストライキとして全学ストライキを闘かうと同時に、総長団交を通じて「国有財産の管理者」と名のる総長が自らの立場では体制の番犬（管理者）としてしか存在し得ていないということを大衆的に明らかにし全教官に対し「管理者として存在するのか、また明確に政府文部省と闘う立場に立つのか？」を迫る必要がある。「私は国有財産の管理者であり権力者である」と称してなんら恥じない総長こそがわれわれの闘争対象である無批判的人間、専門バカそのものである。

(4)すべてのブルジョア試験制度粉砕
われわれの過去はすべて競争であった。そしてわれわれの将来も多分管理労働者として競争に追いまくられるだろう。競争は生産力を向上させるもっとも大きな力となりうる。このようなブルジョア的な競争に基づく単位制し試験制度を粉砕する闘いをわれわれは組まねばならない。そしてまた現在、労働者、学生からかくされた密室の中で行なわれている教官の「研究」に対して、相互批判の場を獲得する場をも闘いとらねばならない。

(5)奥田体制打倒
以上何度もくりかえしのべたような諸制度、諸機構の中枢に奥田総長はボナパッている。われわれはそのような奥田をたおすことによって、大学の現存管理機構を粉砕し、闘う部分の自主管理をかちとる闘いを押し進めなければならない。

反人民的日共・民青と闘う京大全共闘

東大闘争　第一号
―読売事件特集―
目次　よびかけ、東大闘争の展開
時計台占拠闘争への刑事弾圧を完膚なきまで打ち砕き東大闘争に勝利しよう、読売事件の真相とわれわれの闘い、東大闘争とジャーナリズムの「論理」
発行　東大闘争証人の会
東京都世田谷区松原一丁目一九ノ四　川瀬典夫気付
読売ガンバ三百円

（3）教養部闘争の事実報告と展望

寮三項目要求―学生部封鎖の過程で大衆的に登場したC闘委は、一貫して学生部封鎖闘争を闘かいぬき、一・二一全関西集会、羽仁五郎講演会を本部学生部前で勝ちとろうと準備を進めていた。このわれわれの闘争の進展に驚いた大学当局―日共民青は、他大学生、労働者を大学構内にいれないというおどろくべき排外主義を露呈した。

本部のすべての門に、日共職員院生を配備し、学生書提示を要求した。われわれは、このような、法（学則）を盾にとった「暴力」を、明確なわれわれへの闘争妨害であると判断し、C正門前での羽仁五郎氏の講演のあと、本部正門へデモンストレーションで突破しようした。それに対し、日共民青―右翼「一般学生」は、正門に逆バリケードを作り、C正門前で抗議集会を待っているわれわれに対し、放水、投石をあびせかけた。

この日から、学生部封鎖解除に至る「狂気の三日間」が開始される。五者共闘―大学当局―右翼教官の一致「団結」した学生部封鎖解除は、まさしく反革命の狂暴さをあらわに呈していた。結局、ベトコンに対するアメリカ帝国主義の科学兵器と同じく、右翼反革命のそれは、放水・硫酸・バルサン等を駆使した、狂気じみたものであった。結局、反革命の前に一歩後退を余儀なくされたわれわれはこの闘争破壊に対して、総長団交を要求し、自己批判・国大協会長辞任をつきつけた。この間の経過の中で明らかになったことは、

(1) 教授―助教授―講師―助手―院生という封建的講座制を利用し、出席をとったり、教授命令を発動したりしたこと――封建的講座制の温存

(2) 大学による自主防衛とは国大協自主規制路線を貫徹することであり、その路線と同じ路線を日共＝五者は歩んでいること

その後の総長団交の中で、八項目要求をわれわれはつきつけ、国大協自主規制路線粉砕・闘争破壊自己批判・寮三項目貫徹の闘いをおしすすめた。そして、医学部四回生が無期限ストに突入する中で一・三〇の代議員大会にC無期バリケードストが可決された。C無期限ストにひきつづいて、文・医・農・理等の各学部でストが可決された。

その後、二・七、二・一四の民青の露骨な闘争破壊＝代議員大会デッチ上げを、われわれC闘争委員会は四〇〇余名の部隊でもって粉砕し、Cバリケードストを防衛しつつ本部時計台への進撃を準備していった。

二・一七の民青―三谷教養部長代理との団交で、三谷氏は、われわれの闘争を殺人未遂・放火と断定する民青に屈服していった。われわれは、そのような三谷氏の発言を重視し、二・一八に教養部教授会団交を要求したが、部長、評議員（二名）（代理の資格を持つ）の欠席のもとの教官協議会なるものは、何らの決定権のないおしゃべり機関にすぎなかった。ここで教養部の全く無責任きわまる体制が暴露され、このような無責任体制を自己批判する教官が続出した。

二・二二「全関西集会」二・二三「東大日大全国学園闘争勝利京都労学市民連帯集会」に数百の部隊を送りこみ、二・二六本部封鎖闘争を闘い抜いた。

この間、C闘委は、かなりの分解と動揺の相を呈し、クラス・学部闘の動揺の相もつくなってきた。その総括を若干記すと、

(1) 教養部無期限バリケードストだけでは、全学的規模である八項目要求を貫徹できず、各学部での闘争へのとりくみが立ちおくれていたこと

(2) 八項目要求が、闘争破壊への自己批判要求を主軸とし、それなりのネガティブな限界性をもっていたこと。また八項目要求を越える大学革新のイメージを提起するのが立ちおくれていたこと

(3) 大学の管理体制―権力機構の暴露が徹底できなかったこと。

(4) 状況が急転回し、状況によって余儀なくされた軍事が先走りし、武装の内実である思想性が弱かったこと

(5) 普遍的な団結に至る結節点が欠如していたこと

われわれは、二・二六本部封鎖闘争の後、三・三入試闘争を闘うた。

以上の点をふまえた上で、われわれは教養部での闘争の接点を構築せねばならない。つまり《教養部の完全自主管理貫徹》を、その過程で、教養部自主講座（反大学の概念）経理全面公開等の闘争を組んでいかねばならないだろう。そして、京都大学のあらゆる管理機構・権力機構を暴露し、京都大学全学バリケードスト貫徹、自主管理をめざしていかねばならないだろう。われわれの闘いが、原点をどこに持っていようと、現在の管理社会を粉砕していく闘いにつき進んでいかねばならないだろう。

「万人に対する万人の闘争によって、人間がそのような私人として行動し、他人を手段とみなし、自らも手段に頽落し、他の力の玩具となるような」資本主義社会、管理体制が、われわれの闘争対象である。

三里塚からの通信

三里塚常駐
社会党オルグ　村上信義

一九六六年六月二十二日、政府は突如として三里塚空港案を内定し、さらに七月四日閣議決定をもって成田市三里塚に新東京国際空港建設を決定した。

「日本の空の新しい表玄関」と宣伝され、同日「時代の要請」として支配階級が三里塚に建設を決定していらい、三里塚農民は文字どおり国家権力の激しい弾圧、切りくずしにあえぎながらたたかってきた。

今、芝山・三里塚連合反対同盟は三百三十日に三里塚空港事業認定粉砕を中軸スローガンとして全国の闘う同志に向って現地に結集するようよびかけている。

すでに三年間を経過しようとしている三里塚闘争は、反対同盟の連日部落集会や日直パトロールの不屈な闘いが組まれ、一一・二四においては労農学九千を結集し働く階級の強大な反撃の烽火を見た。七十年安保＝戦争とファシズムの嵐を打倒しつくすために、全学連、反戦を中心に結集し現地反対同盟との共同闘争をさらに強固に推進する中から現在の社会の転覆の内容を、その中に含む階級的政治闘争、階級的実力闘争、プロレタリア統一戦線の構築へと前進するものとして闘われたのであった。

三里塚にとって一九六九年は、まさに「決戦の年」でありわれわれにとって「勝利の年」にしなければならない。

(1) 空の合理化と産業再編成の一環

空港建設のマスタープランによれば、滑走路三本（四千メートル三千二百メートル、二千五百メートル）を中心にターミナル、誘導道路、関連施設からなり、空港敷地総面積一千六十ヘクタール。これが七〇年に登場する世界の輸送・交通の超音速化、超大型化に対応するものとしてつまりコンコルド、ジャンボジェット、SSTなどの普及に耐えうる空港として準備されつつある。

プランは、四十六年（一九七一年）に年間の乗降旅客（国際線）二百七十万人（羽田空港四十一年度の二倍強）貨物十七万トン（同三倍強）、五十一年（一九七六年）には旅客五百四十万人、貨物四十一万トンと推定、一日約六万四千人（出迎え、見送り、見学をふくむ）と、約四万台の自動車が出入りすることを見込んでいる。

そして「空の玄関」にふさわしく、この周辺一帯の産業と交通がまったく新しくつくりかえられる。「北総開発計画」の名のもとに、日本の重化学工業の新たな拠点として京葉コンビナート、鹿島コンビナート、それらの都心を結ぶ「東関東高速自動車道路」鹿島線、国道五一号線の延長、国鉄乗り入れなど、総合的計画にもとづいて、新空港を要とした一帯の産業再編成として行なわれようとしている。

この背景には、一九八〇年を目標に、ブルジョアどもの過大な構想として、全国七ブロックの休制化計画がある。すなわち一九六八年十月、経済企画庁が△新全国総合開発計画▽として発表したもので全国を七ブロックにわけ、食糧供給圏（北海道圏、九州圏）地方圏（東北圏、中国、四国圏）、大都市圏（首都圏、中部圏、近畿圏）として形成しようとするものである。

三里塚空港計画は、この過大な計画の突破口であり、千葉県を中心とした関東一帯の農地を解体し――これは農林省の「三百万農家を百万に縮小する」計画と並行している――農民を雇傭な労働力へと吸収しつつ大都市圏構想へと近づけていくものにほかならない。

(2) 海外進出へ輸送強化 国際抑圧体制再編の一環

この三里塚空港計画を粉砕するたたかいのなかで、われわれがあばきだしていかなければならない問題の本質はつぎのことである。

「公共性・社会性」の幻想をまきちらしながら、「空の表玄関」は「アジア太平洋圏」という国際抑圧体制の形成に向かいつつある日本帝国主義の国内分業体制再編（航空輸送強化）の当面の重要な一環である。

この計画のもとでは、農民はもとより、労働者・人民の全体が旧来の生活様式から容赦なく投げ出され、資本が求める新しいより徹底した社会秩序のもとへいっそう悲惨な状態でかりたてられることになる。市民社会の形骸化、地方自治の無力化となってあらわれる大都市圏とは、独占とその政府が考える〝帝国主義的人民抑圧圏〟であるといいきることができる。

航空輸送は今日、特別な任務をもっている。ドル・ポンド危機は国際経済の基礎をなす国際通貨体制が危機におちいっていることを示した。日本の独占にとって、ドルに依存する円の安定のためには独自の努力が必要となっている。成長した生産力を基礎に資本の対外進出を通じて国際的円ブロックの形成、日本独占の強固な経済圏の確立が急務となっている。

帝国主義的支配圏をうちたてるため、この独占の努力はすでに開始されている。東南アジアに向けて、朝鮮半島を第一歩として「後進国援助」「後進国開発」に名をかりた資本進出は、急テンポで増大しつつある。

対外輸送手段として船舶輸送にかわる七〇年代のそれは、超大型航空輸送である。英・仏（コルコンド）、米（ジャンボジェット）で開発中の超大型輸送機は、百台の小型をらくに積む。SSTは千人の乗客を超音速で運ぶ。これらの大型機はいずれも七十年を前後して完成し日航もすでに発注している。

「アジア太平洋圏」に日本独占の支配を象徴する超大型機の航路が、三里塚を拠点としてはりめぐらされようとしているのだ。

(3) 「軍事的」戦略空港

さらに見逃してはならない本質は、交通・運輸手段のなかにかくされている軍事的機能である。軍事的使用が増大する羽田空港の例は、三里塚空港にも当然ひきつがれる。

しかもそれは意図的に計画されている。東北自動車縦貫道にみるように、防衛庁は「重戦車が通れるコンクリートの厚さ、強さ」「飛行機が緊急着陸できる条件」などすべての国家的計画のなかには「治安」軍事的な方面からの横やりがはいっている。

そして、そもそも、コンコルド、ジャンボジェット、SSTなど超音速機が開発される事は直接には「軍事的」必要性からすすめられていた。SSTについては米国ですでに、重爆撃機改造論がおきている。すなわち、アメリカ帝国主義が戦後全世界に設置した人民抑圧の軍事基地がドル防衛という経済的観点から、またアメリカ帝国主義の支配がヨーロッパ、アジアの民族主義と衝突するという現実の政治的観点からも、矛盾を深め、海外軍事基地施設と軍隊の引き上げを余儀なくされるなかで、それでは「いかにしていったんことがおこったらどんなに遠くにでも、瞬時にしてかつ大規模な兵員と兵器を輸送することができるか」という新たな戦略的展開の必要に答えて生まれたのが「超音速・超大型」航空機なのである。

(4) 三里塚の状況 農村コミューンの形成へ

三里塚闘争は三カ年を経過しようとしている。

当初、支配階級のマスコミを利用した宣伝は、「新時代の表玄関は、四十六年完成を目標に建設する」とはなやかであった。さらに八月六日の〝マスタープラン〟の発表は「いまや空港は、建設段階にはいった」と宣伝し、建設ムードの高まりをつくることに狂奔していた。しかし、こうした宣伝とはウラハラに、現実には用地買収交渉や関連事業の難航に頭をかかえ、当初の計画とは似ても似つかぬものとなり、後退の一途をたどってきた。

すなわち、当初の計画では昭和四十五年（一九七〇年）四月までに滑走路三本、ターミナル、誘導路、関連施設の全計画を完成し、一番機を飛ばすとしたものを、四千メ滑走路一本に集中して、昭和四十六年四月までに完成し、残余は四十九年までとしている。

だが、マスタープランが変更されたからといって過信し、楽観してはならない。現に四十二年来の全国的な空港建設のムードづくりおよび現地農民の「あきらめムード工作」から四十二年十月の〝グイ打ち〟による外郭線の設定、土地買収の一般的条件の提示のなかで条件派農民の動揺、四十三年四月二十日から七月十七日に至る物件の立入り調査へと、新しい攻撃は執ようにつづいている。

条件派農民にたいする個人的買収オルグ、反対派のきりくずし、およびボーリング調査、関連事業の遂行の段階に対して、反対同盟は八月二十四日、農具で〝武装〟し、独自でデモンストレーションをおこない、自己の団結をみつめつつ、ボーリング決戦を辞さぬ決意を固めたのをはじめ、一一・二四闘争を全国から八千人の結集をもって指導した。八月の段階からボーリング調査強行がささやかれるなかで、マスタープランどおり空港を建設しようとするならば、当然四十三年度中に強行されるはずであり、十一月はその緊張の頂点であった。この月二十四日、〝武装〟した農民と八千人の実力部隊は、ボウリング調査強行の野望を粉砕した。

マスタープランの変更等によって空港計画は後退の一途をたどってきたわけであるが、七〇年代の新たな政治・経済的軍事的支配秩序の帝国主義的再編の一環として強制的に三里塚空港を建設しようとするブルジョア階級の守護神ども政府＝公団は、四千メ滑走路一本に集中し、建設強行を突破口に全マスタープランを実行せんとしている。

四千メ滑走路用地の約半分の面積をもつ御料牧場（宮内庁用地）の移転は着々と用意され、八月までには栃木県高根沢に完全移転するものと見られ、空港用地外の御料牧場は今に代替地として造成されようとしている。

さらに四月には、資材輸送道路建設計画（土屋→吉倉→法ケ塚→駒井野へぬける道で整地幅百メ・道路幅五〇メ）が強行される模様で、現在、道路測量および買収が行なわれている。

他方ブルジョアキャンペーンなどによる政治的抑圧強化をもって現地農民の団結を切り崩そうとする政府＝公団は、部分的にしろ空港関連事業の遂行・買収オルグに懸命である。

ボーリング調査については、十一・二四闘争の烽火に公団はおどろき、空港建設工事遂行と同時的ゲリラ的に強行するかまえを見せているので、われわれは緊急体制がとれるものとして用意しておかねばならぬ。

公団は、二月十五日「四月第一期工事着工決り」なる発表を行ない、また「八月には、強制収用法を適用する」と国会答弁している。部分的にしろ、工事着工の段階が近づきつつあり、三里塚闘争も本格的な段階へとなりつつある。

このような現状の中で行なわれようとしている三・三〇闘争は、空港事業認定粉砕を中軸とし、新しい工事着工の段階に対するわれわれの闘いの決起集会およびデモンストレーションとして全国総決起せよ！

たたかいの当初「農業を守れ」のスローガンをかかげていた農民は現在、全国的な反戦闘争に参加し、反安保闘争の意識的なにない手として重要な一角をきずく部隊に成長しつつあり、農民活動家の中には「農村コミューンの形成」という新しい言葉で語られるにいたった。

いま、現地農民たちは、農民を収奪し、労働者・人民をも永続的に収奪しようとする国家権力に対し闘いを構築し、全ての闘う部分との統一を強調しつつ「自分のフンドシで闘う」と主体的に空港闘争を貫徹しようとしている。われわれは勝利の展望をそこに見ることができるし、そのように三里塚の農民が自分自身を革命的に変革していくのでなければ三里塚闘争を支える不屈の団結を形成することはできず、長い闘いに勝利することは困難であろう。

また、プロレタリアートの闘いの前進とそれを大胆にすすめるだろう。

闘いのスローガン

☆三里塚空港粉砕
事業認定粉砕
資材輸送道路実力阻止
ボーリング調査実力阻止

☆労農同盟の建設＝労農学の巨大な運動を結合し、コミューン的団結を形成せしめる一歩を固よ！

☆七〇年安保＝「アジア太平洋圏安保粉砕！」

☆農地を解体し、七〇年代の新らたな政治・経済的軍事的支配秩序の帝国主義的再編の一環としての三里塚空港粉砕！

全国の基地へデモ
23日 反安保全国統一行動

反安保全国統一行動の三月二十三日、北海道から九州にいたる全国の米軍と自衛隊の基地は「安保粉砕」「基地撤去」の怒号と赤旗の波にうずまった。「安保廃棄・軍事基地撤去・沖縄返還要求中央集会」が横田米軍基地ちかくの公園で、四千人あまりの、労働者、農民、学生、市民が参加してひらかれたほか、北海道長沼町（ナイキ基地）、青森県三沢市（三沢基地）、愛知県小牧市（小牧基地）大阪府豊中市（伊丹空港）、石川県小松市（小松基地）、福岡市（板付基地）などでデモがおこなわれ、全国で約二万五千人が参加した。

大阪府豊中市の大曽公園では、当日、約三千人の労働者、学生、市民が参加して「大阪空港軍事使用反対・安保廃棄要求関西集会」がひらかれたのち、反戦の部隊を先頭に、大阪空港にむけてデモをおこなった。この集会には兵庫、和歌山、奈良、滋賀の各県からも多数の代表が参加した。ベトナム戦争で破壊された米軍機を整理している新明和工業の正門前で、反戦のデモ隊は乗り込み、抗議した。

この日、大阪府は三千人もの警官を近畿各県からかりあつめてデモを弾圧しようとして、挑発をくりかえしたが、そのたびにデモ隊の断固たる反撃にあって失敗した。この日のデモでは、組合幹部の制止にもかかわらず、戦闘的なデモをくりかえした労組部隊の姿は注目をひいていた。

激しい国際競争下の民間航空業界が、スピードアップと輸送コスト切り下げの「合理化」のためにこの新たな輸送手段に競ってとびついている。しかし、この新たな輸送手段は「一朝有事」に際しては、すぐに帝国主義体制維持＝人民抑圧の手段として「軍事的」に変身するのである。

ベトナム戦争へ加担を強化していらい、日本の軍需生産は飛躍的に拡大し、第三次、第四次の「防衛力整備計画」のなかで明らかなように、自衛隊の使用するすべての兵器を国産化するまでに、日本の軍事体制は自立したものになっている。日本「軍」の発進基地として、迎かれ早かれ三里塚空港が軍事的な正体をあらわすことは明らかなことである。

投書

3・30三里塚空港粉砕集会に参加して

激しい雨が、ときおりの強風を交えて叩きつけるその日は七〇年安保が、厳しい国家権力との実力闘争であり、われわれ闘う主体の側が、その第一歩を力強く踏み出したことを象徴していた。

雨に打たれる色とりどりのヘルメットと、林立する赤旗から導く沖縄で闘っている学生、新潟の農民、関西から来た女子高校生などがわかる。

三里塚公園を埋める数千の労働者、農民、学生の決起集会はいま、全国で実力により権力と闘い、日本の平和と民主主義をかろうじて支えている戦闘的大衆が、新たに闘争の決意と連帯を表明するものであった。

その中で、とくに、目立つことがあった。青いナッパ服の集団の上にはためく動力車労組の旗、反戦青年委員会のヘルメット部隊を先頭にして、ジグザグデモする全電通労組、それらが示す、労働者部隊の登場である。

羽田、佐世保、三里塚さらに米タン阻止新宿闘争、学園における東大、日大闘争が切り開いた実力闘争の形態と質は、生産点においても資本と既成組合指導部が二重に支配する、その鎖をゆさぶり始めたのだ。

矛盾を深める日本帝国主義は安保体制強化、自衛隊の核武装化を狙い、産業再編成など、国内における合理化の徹底、人民への収奪を強化しようとしている。

このような状況の中で、労働者の反合理化の闘いは、すべて国家権力との闘いに発展する。

いまこそ、三里塚を始めとする全国の基地闘争、とりわけ重要な位置を占める沖縄の基地闘争に向けて、今日、学園で、街頭で創り出した闘争の質を生産点に還流し、そこに、闘いを構築しなければならない。

生産点での闘争は、当面の突破口、四・二八沖縄闘争へ結集させる。これが、労働者としての私に課せられた任務である。

（河村高信　21才）

日米安保の再改定・強化を中心とする政治支配の再編は一方で、産業再編成の重要な一環とし、輸送手段の合理化を激しくおしすすめる。

四闘争を全国から八千人の結集をもって指導した。八月の段階からボーリング調査強行がささやかれるなかで、マスタープランどおり空港を建設しようとするならば、当然四十三年度中に強行されるはずであり、十一月はその緊張の頂点であった。この月二十四日、〝武装〟した農民と八千人の実力部隊は、ボウリング調査強行の野望を粉砕した。

マスタープランの変更等によって空港計画は後退の一途をたどってきたわけであるが、七〇年代の新たな政治・経済的軍事的支配秩序の帝国主義的再編の一環として強制的に三里塚空港を建設しようとするブルジョア階級の守護神ども政府＝公団は、四千メ滑走路一本に集中し、建設強行を突破口に全マスタープランを実行せんとしている。

四千メ滑走路用地の約半分の面積をもつ御料牧場（宮内庁用地）の移転は着々と用意され、八月までには栃木県高根沢に完全移転するものと見られ、空港用地外の御料牧場は今に代替地として造成されようとしている。

さらに四月には、資材輸送道路建設計画（土屋→吉倉→法ケ塚→駒井野へぬける道で整地幅百メ・道路幅五〇メ）が強行される模様で、現在、道路測量および買収が行なわれている。

他方ブルジョアキャンペーンなどによる政治的抑圧強化をもって現地農民の団結を切り崩そうとする政府＝公団は、部分的にしろ空港関連事業の遂行・買収オルグに懸命である。

看護婦さん求む！
正看・准看いずれも若干名
反戦運動に関心のある方歓迎
連絡は新左翼社まで

学生運動の諸問題

マンスリーレビュー編集部

アメリカ合衆国の学生運動は、今日おもに黒人居住地区と大学の二つの地区に集中されている。双方とも革命的要素は少数派、いやまったくの少数派である。しかしどちらも、自己の階層以外の多数の人たちの同情を獲得し、ある情況のもとでは彼らを味方につけることができるとみられている少数派であり、恐らく一握りにすぎないのである。黒人革命家と学生革命家はときに抑圧、搾取、不平等、人種的偏見、戦争などの本源的な悪をもつ資本主義＝帝国主義制度を、力づよく明白に拒否する思想をもっている。

しかし、これらの重要な類似性と同時に、少なくともひとつの非常に際立った違いがある。黒人革命家は、遠い未来だけでなく近い将来に何を要求するのかを知っている。ところが学生革命家は遠い先に要求していることは知っていても（資本主義を抑圧のない平等な社会におきかえる）短期間の目標については混乱し分裂している。

黒人革命家の直接的な目的は、この十五年間の歴史のなかで、あきらかになった。この間の厳しい体験を経て、人種的偏見は資本主義＝帝国主義と密接にむすびついたものの一部であることがあきらかとなった。最高裁判所による非隔離学校の決定とモンゴメリーバスボイコットによって生まれた希望は打ち砕かれた。公民権運動は失敗した。この情況から革命とは同時に、少なくともひとつの非常に際立った違いがある。黒人革命家は、遠い未来だけでなく近い

サンフランシスコ大学で学生を襲撃する警官

必要な行動綱領

教育の具体的目標で統一

まず明らかにしておかなくてはならない前提から出発しよう。第一に、今日合衆国に革命的情況はないし、計画しなければならないような情況が目前にせまっているわけでもない。第二に大学は現体制の一部であり、体制があるかぎりそれに奉仕している。第三に体制側であろうと反体制側であろうと、青年たちはできるだけ立派な教育をうけなければならないし、役立てることのできる大学を最大限利用することを意味する。

もしこの前提が承認されるならば、現行の高等教育施設を破壊するという目的は意味をもたなくなる。それは革命的情勢の下でのみ合理的な目標であり、全体として体制から離脱するための包括的な計画の一部として存在する。しかしこのことは大学がいまのままで承認されなければならないとか、学生は支配されている"過程"のなかで受動的に従うだけで選択してはならないということを意味していない。学生は近い将来のために生活しなければならないと同時に施設や制度を改革し、革命的目的のために利用できる制度のひとつであることをみとめないわけにはいかない。

われわれが大学を云々するときもちろん、それを反資本主義の道具に変えることができるような幻想は持っていない。しかし大学は専門化、腐敗、職業化、意識、腐敗の溜の場であってはならない。（大低そうなっているが）冷静に客観的に真実を発見し、教えるというリベラルな教育が理想だとしばしばいわれているが、これは悪いものではない。事実これは独占資本主義の現実とくらべてかなりいいことである。実際にリベラルな教育をうけた人は、歴史感覚をもち科学的な理解力をもっている。また、過去の偉大な哲学者や社会思想家が彼らをとりまく世界に批判的態度をとっていることも知っている。このような人は革命家ではないが、現代の高等教育体系から生れる半ば無学な者や高い知能指数をもった白痴よりも、はるかに革命家に適している。

われわれがいおうとしていることは、革命的学生が具体的にだけでなく全般的に、リベラルな理想を公言する教育者に、学生の主張にしたがって行動するよう指導権を握るべきである。これはいろいろな戦線での闘いをゆくんでいる。すなわち、急進派から入れることをふくめて教授陣を改善すること、学問の自由を厳格に尊重すること、評議員や管理者を財政と経営に限定し、教育問題を学生が統制すること、等々。このような目論見は昨年の春のコロンビアで起った反動的管理者との対決を決して除外するものではない。反対にこのような対決によってのみ勝利はえられるだろう。肝心なことは誰にでも理解でき、対決点のはっきりした、勝ち負けのけじめがあきらかな綱領があるかどうかということである。

このことから、われわれが革命家たちに主張している路線は、リベラル派や多くの保守派――今日合衆国で高等教育の名の下に横行している混乱に眉をひそめている――でさえ受け入れることができるのである。これは間違っているだろうか。いや決して間違っていない。原則的な方法でおこなわれ、革命的な目標を放棄あるいは否定するのでなければ、具体的な目的のために統一戦線をくみ闘うことは、いつのばあいでもいいことである。このような闘争のなかで革命家は最良のもっとも信頼のおける共通の利益の擁護者になることができる。そして革命家は比較的におくれた人たちの尊敬と賞賛をうることができる。さらに革命家は政治的転換の最初の契機となる接触と友好をつくりだすことができる。

しかし現体制の枠内で、大学改革が十分に闘えないことはいうまでもない。革命的な教育をする覚悟をもちその機会を必要としている人たちによって利用されるにちがいない。すなわち歴史感覚をつけるにとどまらず歴史を階級闘争として理解するだけでなく、科学的方法を理解すること、世界に対して批判的な態度をとろうとするだけでなく世界を変革する必要性を認識すること。リベラルな世界観から革命的な世界観に移行することは困難なことである。大学はいかに徹底的に改革されようとも、自分からすすんで改革にのりだすことはないことは自明の理である。それゆえこの任務は革命的学生（そして院生）の手で、学問的環境を作るのに役立つ施設（会議室や図書館等）を最大限に利用して行なわなければならないだろう。これはたとえ小さかろうと、学問の世界にひらかれているだけでなく、資本主義社会が決して提供することのない教育の経験をえたいとのぞんでいる人たちにも平等なカリキュラムを編成することを意味する。この路線にそって合衆国や、外国でいくつか試みられたが、それは散漫でばらばらだった。学生の革命運動はこれらの努力から学んで将来性のあるものを発展させ、さまざまな学問や社会の個々の問題を解決するための新しい実験にとりくむよう、われわれは指摘したい。

われわれは大学内部のことばかりに注意を集中しているから、象牙の塔にとじこもっていると非難されるにちがいない。これに対して次のように簡単に答えよう。一方のこのような綱領と、他方問題の外側に向けての活動――徴兵反対、戦争と帝国主義に対する広範な闘争、外国の革命運動への援助、地域社会の組織化等々――とは少しも矛盾するものではない、と。反対に真剣な学生の革命運動は、あらゆる戦線でなされなければならない。（このことはすべてのメンバーがあらゆる仕事をすることを意味しない。革命運動のような複雑な仕事にはある程度の専門家と分業が必要である）われわれが「内部の」綱領の必要性を強調したのは、今までそれがもっとも不足していると思われるからであり、教育上の大問題に関する綱領をもたなければ、量的にも思想的にも学問の世界に中心をおく革命運動の発展はありえないと思うからである。このように問題は革命家がこれらの問題に関心を持つべきかどうかではなく、立派な革命家となって今まで以上にたくさんの人を自分の側に獲得できるように、どのようにこれらの問題を処理できるかである。

大事な卒後の影響

労学同盟の新しい課題

最後の問題点にうつろう。学生は決して彼ら自身で革命はできず労働者階級との同盟によってはじめて長期にわたって有効な働きをすることができると、しばしばいわれている。経営者層より下の賃金労働者は、稼働人口のなかで圧倒的多数をしめているために、これはたしかに真実であるし、まさにそのとおりである。それはわれわれにとって手のとどかない問題ではない。真の問題は学生諸君が労働者と接触し彼らに革命的な方向をもって影響を及ぼすことが可能かどうかということである。

この問題にはおそらく沢山の答えがあるだろうし、最良の回答をみつけだすためにはたしかに多くの仕事がされなければならない。これについてひとつの容易な方法がまったくみすごされてきたと思われる。

一九六五年についていうと、高等教育の二千以上の施設で、兵役に登録された学生は約五百六十万人いる（注）。これらの学生のほとんどは卒業後労働者になるだろう。またこれらの相当の部分はいしたことのない地方の総合大学単科大学や地方に散在する小さな私立大学にいくだろう。これらの場所ではいわゆる急進的な運動は存在していない。たいていの学生は、彼らの出身階級である労働者階級の上層と中産階級下層の背景を反映しており、それは彼らが頑固になりがちであり、視野がせまく、局地的なものにとらわれやすいことにあらわれている。もし彼らの学生時代に問題も起らなければ、大部分の学生は卒業後入っていく労働者階級（比較的高給のホワイトカラー）のいろいろな層のなかに、同じような思想や姿勢をもちこむだろう。彼らが保守的傾向の地域社会にもどってしまう前に、すなわち学生時代に、学生の革命運動がこの人たちに手をのばし正しい方向（すなわち左翼の）に向けるような機会があるのは、このましいことではないだろうか。とにかく、この理論はいままで試みられたことのない程の大きな規模でためしてみる価値のあるものである。

一九六八年十一月二日

注＝Statistical Abstract of the United States, 1967 p. 133（中見出しは編集部）

（マンスリーレビュー一九六八年十二月号より）訳＝黒江　健

おことわり

前号に予告しました岩井先生追悼集会の関連記事が掲載できませんでした。おことわりします。

映画評

映画「橋のない川」をみて

―私の内なる部落問題―

小森部落の少年、畑中敏太郎は、地主の息子仙吉や在所の子どもたちに毎日ってのようにいじめられていた。その理由は「部落の者である」という、ただそれだけのことであり、いじめる側の仙吉らも、いじめられる小森部落の子どもたちにも、どうしてなのか解らない。ただ親や大人たちがそういうからである。部落の子どもたちは「何で小森の者が、バカにされんのや？」という問いを親に出すが、親のとまどいがちな答の中に、いいえぬ重圧を鋭敏に感じとっていた。

母がふかしたサツマ芋を「クサイ芋喰わした」とハヤシたてられた時、敏然と敏太郎は仙吉に飛びかかり、結果は敏太郎だけが罪を受けることであった。うす暗くなった廊下に、一人必死にバケツを持って立っている孫を見つけた時の、ぬいばあさんの気持は、どんなであったろう。

子どものころから、仲間はずれにされ、いじめられ、差別されてきたぬいばあさんには、その意味することは、胸がしめつけられるほど悲しく、苦しいことであろう。校長と青島先生に両手にゲタを持ったまま跪える者の、血の出るような怒りである。「どねんしたらエッタが直るのか教えてくれなはれ」というその言葉は、闘る私たちに向けて発せられているものでしょう。

校長がいうように、明治四年の「部落解放令」により法律上では、部落は無くなりました。しかし"部落"が本当に存在するのは、人の心の中でした。部落という存在が作られたのは、封建制度を維持するための最も重要な統治政策であったのですから、法律上の文字を消したからといって、その統治政策が人々の心の中にある限り無くならないでしょう。その統治政策というのは、国民を、バラバラな状態にして、一つのまとまった団結した状態にできないようにし、お互いに足の引っぱりあいをさせることです。

地主、佐山の土蔵の前で、小作人が年貢一斗を減らしてくれるよう懇願した時、番頭は「年貢が高いというなら土地を返してもろうてもええで。小森の連中は、在所の者より一斗よけいに年貢を納めるいうてる」といいます。つまり小森部落の人々の果している役割は、小作人たちの高い年貢を維持するために、それ以上に高い年貢をおしつけられ、結果として二番私腹を肥やしているのは地主なのです。

現在全国で約六千部落、三百万の未解放部落があるといわれています。今でもなお「穢多」と呼ばれ、就職や教育、住宅、結婚で差別されているのです。このことは何を意味しているのでしょう。それは、部落そのものは封建制社会の支配のために作られたものではあるが、現在の社会―資本主義社会―の支配のためにも、重要な役割を果している、といえるのではないでしょうか？

労働争議のスト破りに部落の人々が会社側に雇われたり、労働者の賃金を低くおさえるために、更に低い賃金で部落の人たちを雇う。常に半失業の状態に数多くの部落の人々をおいておくことによって、労働者の賃上げ要求の歯止めにする。それは小作人―地主―部落の関係と極似しています。

もしそうであるならば、部落問題は決して過去の遺産ではなく、冷徹な「資本の論理」による非人間化された現在の社会の問題です。したがって、私の内なる部落問題とは、単に部落の人々に同情したり、援助したりする問題だけではなくなります。"お互いが、お互いを信頼せず、働くことに自信がなくなり、自分だけの幸せを追求しようとするような、閉鎖的な人間になっている現在の私たちの状態をよりよく高めていく努力"こそ、根本的に差別を無くしていく運動となるのではないでしょうか。

私たちの心と心の触れ合いを通して、少しでも現在の状況を変革して行くことこそ、私の内なる部落問題です。

東京　高川　次男